# 芥川龍之介「南京の基督」とフロベール

西　原　大　輔

Akutagawa Ryunosuke's "Christ in Nanking" and Flaubert

Daisuke NISHIHARA

## はじめに

芥川龍之介「南京の基督」は，1920（大正９）年７月号の『中央公論』に発表された。作者は「南京の基督」の末尾に，「本篇を草するに当たり，谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず。付記して感謝の意を表す[1)]」と記している。しかし，もし作家自身によるこの出典の明示が，実は「南京の基督」の真の材源を隠蔽するためのめくらましに過ぎなかったとしたら，今日に至るまでの芥川研究者は，まんまとこの理知的小説家に一杯食わされ続けてきたということになるだろう。

芥川が依拠した「秦淮の一夜」というのは，谷崎潤一郎の短編「秦淮の夜」（1919年）のことである。谷崎は1917年頃より，いわゆる「支那趣味」の作品を世に送り出していた。1918年に第一回中国旅行に出かけた谷崎潤一郎は，南京での実際の体験を利用し，「秦淮の夜」を創作している。日本人旅行客が南京の可憐な少女を買い，愛しさのあまり，歓喜の中で抱き締めるという話である。谷崎が実体験に基づいて「秦淮の夜」を書いたのに対し，「南京の基督」は文献によってのみ創られた。芥川が実地に南京を訪れたのは1921年５月のことであり，「南京の基督」執筆時の1920年６月には，まだ中国に行ったことはなかったのである。

「南京の基督」は，南京に住む十五歳の売笑婦宋金花を主人公としている。彼女は敬虔なカトリック教の信者だったが，梅毒にかかってしまう。他人に病気を移すことを恐れた誠実な少女は，決して客をとろうとはしなかった。ところがある時，部屋の壁にかけられている受難のキリスト像にそっくりな西洋人の客が現れ，金花は体を許す。不思議なことにその直後梅毒が直ってしまったことから，売笑婦はその外国人がキリストだと信じるようになった。一方，南京を訪れた「若い日本の旅行家」は，その西洋人がキリストなどではなく，George Murry という日米混血の人物であることを知っていた。そして，「おれはいったいこの女のために，蒙を啓いてやるべきであろうか。それとも黙って永久に，昔の西洋の伝説のような夢を見させておくべきだろうか……」と考えるのであった。

## 一．「秦淮の夜」と「南京の基督」

まず，「秦淮の夜」と「南京の基督」を一字一句比べてみると，共通する語彙が思いのほか乏しいことに気づかされる。「負う所尠からず」どころか，「負う所極めて尠し」だ。谷崎作品から採られているのは，「南京奇望街」「秦淮の孔子様の廟」「姚家巷の警察署」「利渉橋の側の飯館」といった四つの地名のほか，「西瓜の種」「翡翠の耳環」「黒繻子の上衣」「うす暗いランプ」「陰鬱な」「テーブル」「椅子」「籐の寝台」「毛布」「壁紙」といった限られた用語にすぎない。あるいは芥川は，宋金花という少女の名前を，「秦淮の夜」の「金の花形の先に翡翠の玉を附けた耳環」という表現から作り上げた可能性を指摘できるかも知れないが，これも推測の域を出ないだろう。

一方「南京の基督」には，谷崎の「美食倶楽部」（1919年）を連想させる箇所もある。宋金花が夢を見る場面で，「燕の巣，鮫の鰭，蒸した卵，燻した鯉，豚の丸煮，海参の羹」といった料理が登場する。中華料理の名前を羅列するのは，谷崎潤一郎が好んだ文章表現で，「人魚の嘆き」（1917年），「支那の料理」（1919年）や「美食倶楽部」に通じるものである。また，「南京の基督」の次の箇所も，摩訶不思議な中華料理が作品の中心に据えられている「美食倶楽部」からの，明らかな影響と言えよう。

> それにもかかわらずテーブルの上には，食器が一つからになると，たちまちどこからか新しい料理が，暖かな香気をみなぎらせて，彼女の眼の前へ運ばれて来た。と思うとまた箸をつけないうちに，丸焼きの雉なぞが羽ばたきをして，紹興酒の

瓶を倒しながら，部屋の天井へぱたぱたと，舞い上がってしまうこともあった。

芥川龍之介は「南京の基督」に先立って，谷崎作品を利用しつつ新たな創作を行うという手法を既に経験していた。谷崎潤一郎の短編「ハッサン・カンの妖術」(1917年）の登場人物，マテイラム・ミスラを主人公とする「魔術」である。「魔術」は1920（大正９）年１月の『赤い鳥』に発表された。「南京の基督」が執筆される約半年前のことである。谷崎の小説を換骨奪胎して，自分自身の作品に仕立てあげるという創作技法は，決して「南京の基督」が初めてではなかった。

こうしてみると，芥川龍之介が谷崎潤一郎のいわゆる「支那趣味」の作品に，多くの創作上のヒントを求めたことは，確かな事実であると思われる。しかし，「南京の基督」が「秦淮の夜」に負っているのは，小説の舞台設定の面にとどまっているのも，一面の真実だ。芥川が作品から得た情報は，専ら中国にかかわる地名や，宋金花を取り巻く中国風風俗にすぎない。キリスト教，あるいは迷信と信仰といった，この短編の核心にかかわる部分は，谷崎作品とは全く関係がない。「本篇を草するに当たり，谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず。付記して感謝の意を表す」という作者自身の注釈は，この作品を読み解く上で，あまり重要なものではないと言わざるを得ない。

では「南京の基督」は，中国南方都市という小説の背景以外，全くの芥川の独創になるものであって，他に題材となった先行作品は存在しないのであろうか。いや，「南京の基督」には，「秦淮の夜」以外の別な材源があるの可能性があるのではないか。

ひとつの典拠として，志賀直哉の「小僧の神様」(1920年）を指摘する見方がある[2)]。私は，志賀作品がヒントとなった可能性を全く否定するわけではないが，しかしこれは本質的な典拠ではないと考える。第一に，両者に共通しているのは，いわゆる附記の技巧にすぎない。つまり「南京の基督」末尾の，その外国人が実は基督でも何でもなくGeorge Murryという混血児にすぎなかったという箇所である。仮に芥川がこれを「小僧の神様」から習ったとしても，それはせいぜい創作上のヒントにすぎず，典拠や材源と言うにはあまりにも限定的な影響関係にすぎない。また，肝心の結末部分を比較しても，その性格は異なっている。「南京の基督」の最終章では，客の外国人を基督だと思いこんでいたのは単なる迷信にすぎないことが，暴露されている。これに対し「小僧の神様」では，仙吉に鮨を御馳走してくれたのが，神様や仙人やお稲荷様ではなく貴族院議員Ａであることは，始めから読者に知らされている。結末部分でどんでん返しが行われているわけではない。

双方の作品の終わり方は，似て非なるものであって，「南京の基督」が「小僧の神様」を材源としていると断定するには，かなりの無理があると言わざるを得ない。また，「「小僧の神様」との連想を容易にする「娼婦（金花）の神様（基督）から，さらにヒネって「南京の基督」と命名」し，「南京の基督」と「小僧の神様」を結びつけようとする「読者の自然なアナロジイの通路を断った」という議論[3)]も，単なる憶測だ。「南京の基督」という題が「小僧の神様」と関係があるという根拠は，どこにもないのである。では，本当の材源は何なのか。それは，フロベールの「聖ジュリアン」にほかならない。

## 二．芥川と「聖ジュリアン」

ギュスターヴ・フロベール（1821-1880）が「聖ジュリアン」(La L gende de saint Julien l'Hospitalier）を執筆したのは，1875（明治８）年９月から翌年２月にかけの，ブルターニュ海岸滞在中である。その後1877年，彼は「素朴な女」「ヘロデヤ」とあわせ，『三つの物語』(Trois Contes）と題してこれを出版している。ジュリアンの聖人伝は，フロベールが生まれたルーアンの大聖堂の北面側廊にある焼絵ガラスに描かれており，このフランス人作家が子供の頃から親しんでいた「昔の西洋の伝説」にほかならない。

ジュリアンは豊かで善良な城主の一家に生まれた。誕生祝いの夜，両親は息子が聖者になると天使から告げられる。成長するにつれて狩りを習った主人公は，これに熱中して動物を殺し続けた。ある日鹿の家族をしとめた時，父鹿がジュリアンに向かって，「いつかは父と母とを手に掛けて殺すであろう」と予言して息絶える。恐れをなしたこの若者は，父母の住む城から逃げ出すのであった。

ジュリアンは野武士の一群に身を投じた。勇敢な戦闘ぶりで大活躍し，南フランスのオクシタニヤの皇帝を助けた彼は，皇帝の娘をめとり，のんびりと暮らし始める。ある日ジュリアンが留守の時，年をとって落魄した両親が彼を訪ねてきた。妻は二人を

ジュリアンのベッドに寝かせる。それと知らずに帰宅した主人公は，自分の寝床に男がいるのを知り，妻に密通したものと思いこみ，過って二親を刺し殺してしまう。父母の葬式を終えたジュリアンは，一切を捨てて乞食となった。

放浪の末，ある川のほとりにたどりついたジュリアンは，渡し場を作り，船頭になった。他人のために生涯をささげようという気持ちだった。ある晩，醜い癩病やみがやってきた。癩病やみは，腹が減った，のどが渇いた，寒いと訴えるので，善良なジュリアンは，惜しむことなく食べ物飲み物や火，さらには寝床まで与える。「聖ジュリアン」の白眉たる結末部分を引用しよう。

癩病やみは両眼を瞑った。
「なんだか己の骨々の中には氷が這入っているようだ。己の傍へ寝て温めてくれぬか。」
ジュリアンは帆木綿をまくって，例の木葉を掻き集めた床の上に，病人と体がぴったりくっ付くようにして横になった。
癩病やみは顔をジュリアンの方へ振り向けた。
「裸になって，もっとしっかり温めてくれい。」
ジュリアンは着物を脱いだ。そして生れたばかりの時と同じように，真裸になって，又床に這入った。そして体を病人にぴったりくっ付けると，丁度自分の股の所が病人の肌に触れる。その肌は蛇の皮よりも冷たくて，鑢よりもざらついているのである。
ジュリアンは病人の気を引き立てようとして，何か詞を掛けている。病人はうめきながら云う。
「ああ。己はもう死ぬる。もっと傍へ寄って温めてくれい。そう手なんぞでいじってくれるのでは温め足りない。体じゅうで温めてくれい。」
ジュリアンは両臂を拡げて丁度蓋になるように，病人の上に俯伏した。口と口と合い，胸と胸と合うのである。
その時癩病やみは両手でしっかり抱き付いた。忽然両眼が空の星のように，明かに輝いた。頭の髪が長く延びて太陽の光線のように照った。左右の鼻の孔から吹く息は薔薇の花の香のような香がする。小屋の囲炉裏の中から護麻の煙がわき立つ。川の波が讃美歌をうたう。その時溢れるほどの歓喜，この世にない安楽が，潮の寄せるように，随喜渇仰するジュリアンが魂の中に這入って来る。そしてジュリアンを抱いている，不思議の人の身の丈が段々伸びる。伸び伸びて，とうとう頭が小屋の一方の壁に障り，足が他の一方の壁に障るようになる。小屋の屋根は飛んで行って，上には大空が限りなく拡がる。そしてジュリアンは蒼々とした無際限の空間に登って行く。自分を抱いていてくれる耶蘇基督と顔をぴったり合せて。

これが客を遇する情の厚い聖ジュリアンの物語である。我が故郷の寺の窓の硝子絵にこんな風にかいてあるのである[4]。

ではいったい芥川龍之介は，このフロベールの「聖ジュリアン」をどのようにして手に入れ，どんな刊本を読んだのだろうか。彼は，フランス語の書物を原語で読む能力は持っていた。仏語の原書でフロベールに触れた可能性もないわけではない。しかし実際に彼が手にしたのは，森鴎外による翻訳「聖ジュリアン」だったと思われる。森鴎外訳「聖ジュリアン」は，まず雑誌『太陽』に1910（明治43）年5月から7月にかけて掲載され，次いで同年，『現代小品』に収められた。文豪鴎外が，創作作品のみならず，実に多くの翻訳文学を残していることは，比較的良く知られている。ドイツ語を経由して行われた森鴎外によるこの訳業について，小堀桂一郎は，「訳文がまた素晴しい」「文体の，厳しい，簡潔な，映像の輪郭が実に鮮明に浮かび上ってくるような格調の高さ」「かくも見事に鴎外の筆によって日本語に移植・再生されたというのはたいへん幸福な文学史的遭遇であった」と絶賛している[5]。

森鴎外の「聖ジュリアン」が雑誌『太陽』に掲載されたのは，1910（明治43）年である。一方，芥川龍之介の「南京の基督」は1920年6月執筆で，両者におよそ十年の開きがある。典拠として利用したにしては，やや時間的に離れすぎていると言えなくもない。しかし，「南京の基督」誕生の前年にあたる，1919年3月及び5月の『新小説』に，芥川は「きりしとほろ上人伝」を発表している。「きりしとほろ上人伝」は，「聖ジュリアン」から影響を受けたことが，既に知られている。1919年から翌年にかけて，フロベール「聖ジュリアン」に，この作家が強い関心を持っていたことは，疑いない。

「きりしとほろ上人伝」を執筆した翌1920（大正9）年，つまり「南京の基督」創作と同年，芥川は「聖ジュリアン物語」という短い文章を残している。作家はここで，「末段昇天の数行（ジュリアン

が裸になって癩病人を抱いてより以後）は技巧の妙云う可からず。これを形容すれば万丈の光焔忽然として脚底より迸出するが如し[6]」と，先に引用した「聖ジュリアン」の結末部分を称賛している。さらに芥川の「聖ジュリアン物語」は，「聖ジュリアン」を収めた森鴎外の翻訳作品集『現代小品』に言及しており，芥川龍之介が鴎外の日本語訳に依拠してフロベール作品に触れたことは間違いない。断片「ある鞭，その他（仮）」（1926年頃）でも，「僕の心を捉えたものは聖人や福者の伝記だった[7]」と述べる。「南京の基督」執筆の前後，芥川が「聖ジュリアン」に強い関心を寄せていた事実を示す状況証拠は，出揃っている。

## 三.「南京の基督」と「聖ジュリアン」

実際，芥川龍之介の「南京の基督」とフロベールの「聖ジュリアン」は，数多くの特徴を共有している。まず，「南京の基督」の一つの特徴として，昔話に必須の単語「ある」が多用されていることが挙げられる。小説は，「ある秋の夜半であった」で始まり，「南京奇望街のある一間」が舞台となる。「するとある日」「翌年の春のある夜」といった表現も見ることができる。また，「すると」「が，」という，語り口調に特有の接続詞も頻出している。西洋人が部屋に入ってくる一節は，「するとほとんどそのとたんに」で始まっている。

これらの特徴を，森鴎外訳「聖ジュリアン」と比べるならば，両者に著しい類似性があることは明らかだ。「或る」が頻出するのは，「聖ジュリアン」の特徴そのものである。具体例を列挙すると，「或る日寺の儀式の間に」「或る日寺に行って」「或る朝園から」「或る冬の朝のことであった」「或る夏の晩のことである」「或る年の八月某日の夕暮であった」「そこで或る日ジュリアンは」「或る夜ジュリアンが眠っていると」など，実に多くの昔話風の「或る」が使われている。

細かな部分に注目すると，両者にはさらに多くの類似点を見いだすことができる。ジュリアンの城には，「壁のくぼみにかかっている象牙のキリスト像」があったが，宋金花の部屋の「壁には，すぐ鼻の先の折れ釘に，小さな真鍮の十字架がつつましやかにかかって」いる。「聖ジュリアン」の癩病病みは，「胸のわるくなるような臭い息を吐いていた」が，「南京の基督」では，外国人「客の吐く息は酒臭」い。また，癩病病みの「態度には，王者の風格ともいうべきものがうかがわれた」のに対し，西洋人客の「容子も，金花には優しい一種の威厳に，充ち満ちているかのような心もちがした」という。

「南京の基督」の奇跡の描写は，「聖ジュリアン」の結末部分に類似している。先に引用した「聖ジュリアン」と比べつつ読んでみたい。

> 客はズボンの隠しを探って，じゃらじゃら銀の音をさせながら，依然とうす笑いを浮かべた眼に，しばらくは金花の立ち姿を好ましそうに眺めていた。が，その眼の中のうす笑いが，熱のあるような光に変わったと思うと，いきなり椅子から飛び上がって，酒の匂いのする背広の腕に，力いっぱい金花を抱きすくめた。金花はまるで喪心したように，翡翠の耳輪の下がった頭をぐったりとうしろへ，仰向けたまましかし蒼白い頬の底には，あざやかな血の色をほのめかせて，鼻の先に迫った彼の顔へ，恍惚としたうす眼を注いでいた。この不思議な外国人に，彼女を体を自由にさせるか，それとも病を移さないために，彼の接吻をはねつけるか，そんな思慮をめぐらす余裕は，もちろんどこにも見当たらなかった。金花はひげだらけな客の口に，彼女の口を任せながら，ただ燃えるような恋愛の歓喜が，はじめて知った恋愛の歓喜が，激しく彼女の胸もとへ，突き上げて来るのを知るばかりであった。……

「聖ジュリアン」では，「忽然両眼が空の星のように，明かに輝」き，「頭の髪が長く延びて太陽の光線のように照った」のに対し，「南京の基督」では，「眼の中のうす笑いが，熱のあるような光に変わ」る。フロベールでは「この世にない安楽が，潮の寄せるように，随喜渇仰するジュリアンが魂の中に這入って来る」が，芥川では「燃えるような恋愛の歓喜が，はじめて知った恋愛の歓喜が，激しく彼女の胸もとへ，突き上げて来る」のである。その際，「癩病やみは両手でしっかり抱き付き」，外国人は力いっぱい金花を抱きすくめ」る。ジュリアンと癩病やみは「口と口と合い，胸と胸と合う」のだが，「金花はひげだらけな客の口に，彼女の口を任せ」ている。不潔で嫌悪感を覚えるような男との同衾から，にわかに歓喜へと転ずる趣向も，両者に共有されている。恋愛の歓喜と宗教的歓喜という，聖俗の違いが，聖人伝と芥川とを大きく隔てているもの

の，発想は極めて似通っている。

また，「南京の基督」では，宋金花と西洋人とが結ばれた歓喜の夜，「金花の夢は，ほこりじみた寝台の帳から，屋根の上にある星月夜へ，煙のように高々と昇って行った」とある。これは，「聖ジュリアン」の結末部分，「屋根が飛び去り，天空がひらける。――そしてジュリアンは，主イエスと向かいあったまま，青空を天へ運ばれて行った」という一節と，極めて似通っている。「寝台」「屋根」「星月夜」「高々と昇って行った」といった要素は，「聖ジュリアン」そのものと言って良い。「光」が，大切な役割を果たしている点も同一である。「聖ジュリアン」では，「突然，その目は星のように輝きはじめ，髪は太陽の光線のように長くのびた」。一方「南京の基督」では，西洋人の「眼の中のうす笑い」が「熱のあるような光に変わ」るばかりではなく，金花の夢の中で「ちょうど三日月のような光の環が，この外国人の頭の上，一尺ばかりの空くかかっていた」とされている。

二作品の類似性をさらに見てゆこう。ジュリアンの小屋と宋金花の部屋は，共に大変質素だ。「聖ジュリアン」では，「小さなテーブルが一つ，床几が一つ，枯れ葉で作った寝床，粘土のコップが三つ，家具といえばそれだけである」が，一方「南京の基督」では，「壁紙のはげかかった部屋の隅には，毛布のはみ出した籐の寝台が，ほこり臭そうな帳を垂らしていた。それからテーブルの向こうには，これも古びた椅子が一脚，まるで忘れられたように置き捨てて」あり，「そのほかはどこを見ても，装飾らしい家具の類なぞは何一つ見当たら」ない。さらに，「癩病」と「梅毒」という感染性の病気が大きな意味を持っている点も，見過ごすことはできない。

「南京の基督」の各文末に注目していみると，驚くべきことに，地の文がほとんど全て「た」形で終わっている。「であった」「があった」「てあった」「ていた」「なかった」「らしかった」「した」「になった」「てしまった」と，その一本調子の文体は，驚くほど徹底している。例外は西洋人が部屋に入ってくる場面で，「その勢いが烈しかったからであろう」「客の年ごろは三十五，六でもあろうか」という二箇所，さらに宋金花の夢が醒める下り，「あの怪しい外国人の足音でも聞こえたためであろうか」「記憶を喚びさましたためであろうか」の合計四箇所のみである。すなわち「南京の基督」は，文体が単調になることを恐れず，徹底した「た形」の文を反復して，時間軸に沿った物語叙述に徹している。翻訳の名手森鴎外は，「聖ジュリアン」を「た形」の一本調子で訳してはいながいものの，「南京の基督」の物語的叙述は，「聖ジュリアン」とも極めて共通していると言えるだろう。

一方で対照的なのは，結末部分である。「聖ジュリアン」では，醜い癩病患者が実はキリストだったとなっている。これに対し「南京の基督」では，宋金花が基督だと思いこんでいた男が，実は無頼な混血児にすぎないとされる。芥川龍之介の創作の主眼は，この点にあったと言ってよいだろう。聖人伝のクライマックスを，みごとに転倒してみせたのが，作家の工夫だったのである。

芥川龍之介が森鴎外の翻訳文学を利用し，しかもその事実を隠蔽したまま，何食わぬ顔をして作品を発表するという行為は，「南京の基督」が初めてではない。例えば1915年に発表された「羅生門」は，『今昔物語集』を素材にしたように見せかけつつも，実際は，森鴎外の日本語訳によるフレデリック・ブウテエ作「橋の下」（1913年翻訳）の翻案であることが，既に指摘されている。また，芥川の「青年と死」（1914年）は，表向きは『今昔物語集』に依拠したように作家は述べているが，実際は，森鴎外訳のホフマンスタアル作「痴人と死と」（1908年翻訳）を下敷きにしたものであった[8]。「南京の基督」は，これらと同様の手法で創作されたものであって，「本篇を草するに当たり，谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず。付記して感謝の意を表す」という一行は，読者を欺くための囮，本当の材源を知られないためのカモフラージュだったのである。

しかし芥川は，「南京の基督」の中で一か所，出典の秘密に触れる記述を残している。小説の末尾で，「若い日本の旅行家」は，「おれはいったいこの女のために，蒙を啓いてやるべきであろうか。それとも黙って永久に，昔の西洋の伝説のような夢を見させておくべきだろうか……」と語る。ここで重要なのは，「昔の西洋の伝説」という言葉だ。これは，フロベールの「聖ジュリアン」を指していると考えるのが順当であろう。「昔の西洋の伝説」という一節に注目し，これが実際にどんな作品を指しているのか，考察した研究は，従来皆無であった。ここで芥川は，隠したはずの本当の出典の尻尾を，見せてしまっているのだ。

## 四．創作の動機

では，なぜ芥川龍之介は，フロベールの「聖ジュリアン」に心を動かされたのだろうか。また，なぜこの日本人作家は，「聖ジュリアン」に刺激されて，「南京の基督」を生み出したのであろうか。一つの考え方として，信仰と知性の矛盾を読み取ることもできる。宋金花は無知であるが故に，たまたま客となった外国人をキリストと信じ続け，幸福を味わっている。芥川が「南京の基督」で問いたかったのは，はたして知性は人間を幸福にするものなのかという問題だ，と主張することもできるだろう。

しかし私は，そのような解釈は，あまり創作の本質をついていないと思う。芥川龍之介が信仰と知性の背馳を主題とするために「南京の基督」を執筆したというのは，必ずしも当たってはいない。そのような安っぽい哲学的議論が，この短編の魅力なのではない。ましてや，作品のテーマは迷信の幸福であるのか，それとも迷信を暴いたものなのかといった詮索は，副次的な問題だ。「南京の基督」が読者を引き付けるのは，その技巧，描写の卓抜さにほかならない。徹底した技巧，彫琢をほどこした描写こそ，この小説を支える力であり，また作者芥川龍之介が目指したものである。

まずは，「南京の基督」と同じ1920年に書かれた，芥川の「聖ジュリアン物語」に注目してみよう。これは，フロベールの「聖ジュリアン」を読んだ後の一種の感想文で，『芥川龍之介全集』でも二ページに収まってしまう短いものである。「聖ジュリアン」は，冒頭の予言が大切な役割を果たしている。これについて芥川は，「技巧より見れば二つの幻に各別様の趣ありて共に一種の凄味ある点凡手の描き難き所なり」と称賛する。また，その後の鹿の予言については，「前掲二種の予言を二つながら成立せしめる大切な楔なり」として，物語の展開上のしかけに注意している。さらに，「始父親の衣を剣にて裂き次に母親の帽の羽根を投槍にて縫いとめ而して家出する段取り甚自然なり」と，ストーリー展開の「段取り」の巧妙さに関心するのである。

芥川龍之介の興味は，フロベールの描写技法にも向かった。「ジュリアンが城外城内に於ける生活の描写究めて精妙なり」「牡鹿の描写殊に愛す可き中世紀の風格を帯びたり」「ジュリアンの生活（内面的にも外面的に）も巧に描かれたるを見るべし」「家出より皇帝の婿になる迄の間例の如く描写巧緻を極む」「ジュリアンの猟に出て鳥獣に莫迦にせらるる所全篇を通じて結末と共に千古に冠絶する名描写なり」「奇蹟は次第に重ね来りて遂にクリストを描出する所亦甚自然なり」と，日本人作家はひたすらフロベールの描写の巧みさに感嘆している。芥川が最も絶賛したのは，「聖ジュリアン」の結末部分で，「末段昇天の数行（ジュリアンが裸になって癩病人を抱いてより以後）は技巧の妙云う可からず。これを形容すれば万丈の光焔忽然として脚底より迸出するが如し」と述べている。結局，芥川龍之介が関心をもっているのは，専ら「技巧」「描写」「段取り」といった語りの技法であって，作品のテーマではなかったのである。

1920年７月に「南京の基督」を発表した時期，芥川には，フロベール「聖ジュリアン」に言及したり，その影響を受けたりした作品が多くみられる。1919年３月には，「きりしとほろ上人伝」を，同年９月には「じゅりあの・吉助」を，翌1920年には批評「聖ジュリアン物語」を，しばらく後の1926年12月には，書評「猪・鹿・狸」がある。これらの文章，特に小説では，「聖ジュリアン」の技法や表現の影響が顕著に見られる。「きりしとほろ上人伝」では，そのそも聖人伝という形式自体がフロベールの刺激によるものである上，主人公が川の渡し守になる点，たまたま通りかかった人物が実は「えす・きりしと」だっという結末など，芥川は恥ずかしげもなく「聖ジュリアン」を模倣した。

また，「じゅりあの・吉助」の主人公「じゅりあの」という名も，明らかにジュリアンを意識している。さらに，「じゅりあの・吉助」の結末部「これが長崎著聞集，公教遺事，瓊浦把燭談等に散見する，じゅりあの・吉助の一生である[9]」は，「聖ジュリアン」の「これが客を遇する情の厚い聖ジュリアンの物語である」という最後の一行を真似たのであろう。芥川龍之介は，ことほどさようにフロベール作「聖ジュリアン」の魔力にとりつかれていたのだ。ただし芥川は，キリスト教という信仰そのものに魅せられたのではなく，文学としての聖人伝の面白さにひかれたにすぎない。まさに芥川自身の言うように，「彼等の捨命の事蹟に心理的或は戯曲的興味を感じ，その為に又基督教を愛した」にすぎず，「基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だった[10]」（「ある鞭，その他（仮）」）のである。

すなわち，「南京の基督」創作の根源にあるのは，文学技法への関心であって，信仰の問題ではない。

これまで多くの国文学者が議論してきたような，信仰や迷信や幸福といったテーマは，作家にとってはさほど重要ではなかったと言わざるを得ないのである。「南京の基督」が，文学的手法への関心から誕生したことをうかがわせるもう一つの側面がある。それは，「支那趣味」という当時の最新の流行だった。

谷崎潤一郎は1917（大正6）年，同じく南京を舞台にした「人魚の嘆き」を発表した。谷崎は翌1918年に第一回中国旅行に出かけ，その後も次々と「支那趣味」の作品を執筆している。1919年には，「美食倶楽部」「蘇州紀行」「秦淮の夜」「支那劇を観る記」「支那の料理」「西湖の月」「或る漂白者の俤」「天鵞絨の夢」等を，そして芥川の「南京の基督」が発表された1920年にも「蘇東坡」「鮫人」を，1921年には「鶴唳」「廬山日記」を世に問い，1922年には随筆「支那趣味と云うこと」を書いて，「支那趣味」の第一人者となったのである。

芥川龍之介は，谷崎潤一郎の「支那趣味」を非常に意識していた。『支那游記』では繰り返し谷崎に言及しており，谷崎の「支那趣味」が芥川に与えた影響の強さをうかがわせる。自分も中国を舞台にした異国趣味の作品を書いてみたいという強い思いを，「南京の基督」執筆当時の芥川が持っていたことは疑いない。しかし，「支那趣味」だけに頼っていたのでは，谷崎を越えることは難しい。芥川龍之介は，谷崎潤一郎ほど中国の風俗や物産に詳しくはなく，また実際に中国大陸の土を踏んだこともなかった。そこで，フロベール作「聖ジュリアン」の技巧や段取りを用いることにより，谷崎とは異なる風格の「支那趣味」作品を作ることが可能だと考えたのではあるまいか。

この時芥川龍之介は，創作の鍵たる「聖ジュリアン」の存在については，なるべく隠蔽しておきたいという衝動に駆られたにちがいない。「西瓜の種」「翡翠の耳環」「紫檀の椅子」といった異国趣味的細部描写については，谷崎に依拠したことを率直に認めつつ，一方でフロベールの「聖ジュリアン」の手法についてはこれを隠し，まるで芥川自身の独創であるかのように見せたかったのだ。「本篇を草するに当たり，谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず。付記して感謝の意を表す」という一文は，そのような心理の中で書き加えられたものと考えられるのである。

## 注

1）芥川龍之介「南京の基督」からの引用は，以下全て『芥川龍之介全集』第6巻，岩波書店，1996，236-253頁による。
2）鷺只雄「「南京の基督」新攷——芥川龍之介と志賀直哉」，石割透編『芥川龍之介作品論集成』第3巻，翰林書房，1999，123-137頁。
3）同上，129頁。
4）森鴎外訳「聖ジュリアン」からの引用は，以下全て『鴎外全集』第6巻，岩波書店，1972，511-552頁による。
5）小堀桂一郎『森鴎外——文業解題（翻訳篇）』岩波書店，1982，69頁。
6）芥川龍之介「聖ジュリアン物語」からの引用は，以下全て『芥川龍之介全集』第22巻，岩波書店，1997，308-309頁による。
7）『芥川龍之介全集』第23巻，岩波書店，1998，221頁。
8）小堀桂一郎『森鴎外の世界』講談社，1971，368-397頁。
9）『芥川龍之介全集』第5巻，岩波書店，1996，98頁。
10）『芥川龍之介全集』第23巻，岩波書店，1998，221頁。

付記　本論文は，『台大日本語文研究』第9期（台湾大学日本語文学系，2005年7月），181-213頁，に掲載された。日本国内の芥川龍之介研究者に，全く読まれていない状況があるため，ここに再録する。初出では中国語及び日本語の二ヶ国語で発表されているが，ここでは日本語部分のみを収めた。